

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	人相學に付て：雜録
Author(s)	甘草生
Citation	龍南會雜誌， 6 3： 2 9 - 3 4
Issue date	1898-02-17
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5041
Right	

小原の百姓に附托し、所謂里子となして、育成したる實例の如く、化學的より通觀するときは、即ち是は那篤倫鹽の多き華食者にありて、智は加里鹽の多き蔬菜者にありと云はざる可からず、嗚呼學童を有する都會魚鹽地の居住民は殊に家訓を嚴にして、躰育智育即ち食育なりと觀念せざるべからず。願くは我邦中古往時の食養法と料理法と化學的の食養法とに意を留めて獸食の弊なからんことを希望す。

(完)

雜 錄

人相學に付て

甘 草 生

人相學なる名稱は、路傍の賣卜者を除けば余其開祖の名譽を荷ふを得べしと信ず。所謂人相學とは何ぞや。他なし、顔貌の觀察に由りて人の性質を察知する方法を論ずる科學これなり。夫れ人の性質を察知するの必要なる、今更喋々之を辯するの要なかるべし。吾人は人類の一員として、國民の一員として、學校生徒の一人として、家族の一人として一日も察人を廢する事を得ず。而して察人の困難なるは古來の歴史、社會の現状の證明する所、今や察人の巧拙正否は人の智慧に一致せんとするの有様なり。我龍南會雜誌上、此種の問題を論ずるもの徳谷君(第六十三號)及び不知生(第六十四號)の二氏あるのみ、而も二氏は察人を人の行爲に依りてなさんとす。二氏の察人論は余の双手を舉げて稱讃する所なれども、人間處生の繁雜なる、往々他人の行爲を觀察するの閑時を得ざることあり。此に於てか人体の形質に據りて、其性質を察知する事を得ば一日して察人することを得べく、其輕便人世を益

すること勘からざるべし。人相學は實にこの便益を與へんがために起りたるものなり。人の身体長さ六尺を出でず、重さ二十貫を過ぐるもの少なし。而も複雑なる構造を有え、顔、頸、手、腹、腰、足等其稱呼一々枚舉に堪へず。此等の各部一として察人の要素たらざるはなく、若し人相學を廣意に解すれば此等の人体各部の觀察をなさるべからず。然れども其最も重要にして、最も觀察に便なるは顔なり。これ狹意に解えたる人相學の唯顔面の觀察に由る所以なり。

西洋のことは暫く之を措き、東洋に於ては古來觀相法なるものあり、一個の鏡を取て顔面を伺ひ人の吉凶禍福を判知するなり。所謂人相學は此種のものに相違なし。而して余の所謂人相學は賣卜者の會得せるものなるや、余の所謂人相學は坊間販賣せる『人相指南』『人相獨稽古』の類に等しきか、余の所謂科學としての人相學豈此の如きものならんや。然れども人相學今日の程度を以て科學の名稱を附することを得るや、少しく疑なき能はず。ヘルムホルツ氏は曰く科學は法則の智識なりと。又スペンセル氏は吾人の智識を三階級に分ち、其第二を科學的智識とし之を解するに統一したる智識なりとせり。現時の人相學は果して法則をなせるか、否。將た統一せたる智識なるか、否。然らば所謂人相學を科學なりとするは非か、俄に首肯する能はざるものあり。吾人は之を亦木文學士に聞く、科學は分類せたる智識なり、科學は秩序ある智識なり、科學は概括したる智識なりと。余は決して今日の人相學に完全なる分類あり、完全なる秩序あり、完全なる概括ありと云はず。而も『人相指南』に所謂人間の十二宮は多少分類したる智識にあらずや、三停三才六府は多少秩序ある智識にあらずや、天底印堂の紋は多少概括せたる智識にあらずや。人相學は現今の進歩にて科學たる能はざること、素より論なし。然れども當今世人の所謂科學なるものは悉く完全なる資格を具ふるものなるか、恐らくは未來の

完成を期えて科學の名稱を恣にするもの多かるべし。余が人相學を科學なりといふもの亦此意に外ならず、況んや今後科學的研究を積まば完全なる科學たるに至るや、殆ど疑を容れざるをや。彼の坪井理科大學教授の『重ね撮り寫眞を利用したる觀相法』(東洋學藝雜誌第百五十七號)の如きあるを見るも、余の希望の妄ならざるを證するに難からざるべし。

誰か云ふ、心の作用は無形上に属え、身体の組織は有形上に關す、各個殊別のものなりと。吾人は日常の經驗に因り、心身各孤立して働くこと能はず、二者相俟て靈妙なる活動を現はすものなるを知る。即ち心の作用を外部に表出するには四肢軀体の動作を以てせざるべからず、外界の事物を感受するには耳目鼻等の五官に依らざるべからず、其間寸毫も相離るべからざる關係を有せり。故に身体に變異あれば精神に影響を及ぼし、精神に異狀あれば身体に結果を表はすこと當然の理なり。此の心身相關の理法は特に顔面に於て深きを見る。人若し憤怒の情甚しきとき、或は慚愧の情に耐へざるるときは顔面朱を注ぐが如き、驚愕の情過度なるときは顔面菜色を呈するが如き、其適證にあらずや。何ぞや。之を要するに思内にあれば色外に形はるべく、如何に之を忍ぶれど色に出つることは物や思ふど人の問ふを待て知るべきにあらざるべし。これ實に心理學の證明する理法にして、人相學上要用なる大原理たり。而も顔貌の觀察に依りて各人現在の心情を判定する所以を證することを得るも、未だ之を以て人の先天的性質を辨明するに足るの理由を説明する能はざるなり。

凡そ生物は皆生殖して自己体に能く似たる個体を後に遺すものなり。これ生物學上所謂遺傳と稱する現象に於て、瓜の蔓に茄子の實るとなきは何人も疑はざる所なり。而して其遺傳質も一代にして現出するものあり、又數代にして現出するものあり。吾人人類に付て見るも父母の形質が子に現出する

とあり、其子に現出せずして孫に至りて現出するとあり。蓋し遺傳質は一代或は數代の間潜伏することを得べく、甚しきに至りては數百或は數千代の間潜伏し其祖先の有せし形質を現出することあり、所謂『先祖返り』Reversionなるものにして、人類の身体に往々下等動物の有する形質の現出するは此理に因れり。彼の數對の乳房を有するが如き、四本六本或は七本の指を有するが如き、尾骶骨の末端に軟骨質の尾を有するが如き、其他先天的の龜手、兎唇、半陰陽等の如き造化の惡戯毫も怪むに足らざるなり。而して遺傳の現象は唯だ肉体上に止まるか。生殖細胞染色体の研究定らず、神經發生の狀明かならざる今日にありて、是に論斷を下すは危險なるべきも、余は固く信ず、人類肉体上の遺傳及び『先祖返り』は又之を精神上にも適用するを得べきものなることを。南米の黒奴、北米の印度人及びスパンニア人の合ひの子の猛惡なるは其性質の邪僻を證するものにあらずや、毛人なるものゝ奇異なる面貌は其性質の劣等なるを示すものにあらずや、假令カムペル氏の顔面角は規整はざるにもせよ多少の科學的價值を有するものにあらずや。然りと雖ども余は直に人の顔貌を下等動物に比較して、其類似如何に據りて其性質を確定するを得となるものにあらず、唯だ肉体上の遺傳と精神上的の遺傳と多少相伴ふの徴候あるを述ぶるのみ。これ又、人相學の原理として幾分の効益あるを信ずればなり。

心身相關の理法は人相學基本の原理となすに足らず、遺傳説又確乎たる原理たる能はずとせば人相學の基礎は那邊に定むべきか。抑も地勢風土氣候地味等の自然的現象、風俗人情宗教歴史等の社會的現象の人の心身を感化し、其感化遺傳となりて子孫に發せ、其子孫も亦更に其直接する自然的現象、社會的現象のために多少の感化を受け、各自一定の性質を作るに至り、千人千色を生し萬人萬別を生

じて、殆ど天下に同一の形質心情を有する人あらざるか如きの觀あり。而も同一の事情の下に生活するものは、幾分の差別あるにもせよ各人の間に尙ほ普通の性質の見るべきありて、其人に接するときには其如何なる事情の下に生活せしものなるかを察知すること難からず。これ社會學上の原則にして又、人相學の要用なる原理たるべきものなり。されば前に論せし人の精神上の變動身体上に異狀を呈するや、其事情繼續すれば身体に固定せる變狀を呈す遂に其特質たるに至るべく、例へば悲愁の情に迫るときは眉間に縦行の皺を生し同時に額に横行の皺を生じ相合して三方形の皺を表はすを常とす、人若し悲愁連續止むことなくば其三方形の皺も延ぶる時なく、遂に顔面の特質たるに至るべし。又自然的社會的の外界事情は心身二者を感化せん人類に特種之性質を與ふ可く、例へばエスキモー人は生肉を大食し咬嚼筋を運動せしむること甚しきより、該筋と顚顚骨との二者非常に發達し多食を好み長顚をなすに至りたるが如し。此の如き特質を子孫に遺傳し、子孫又同様の事情に由りて感化せられたりとすれば、特殊の形質に特殊の心情の伴ふ所以解するを得べく、若し數十人數百人に就きて其形質と心情との關係を調べ其間に一定の關係あることを明にせば、之を規範 *Norma* とし、人の形質を見て其心情を察すること難きにあらざるべし。方今散見する『人相獨稽古』等にある人相圖は、數百年數千年の昔當時の人の顔貌を觀察して得たる規範にして、今日に於ては不當なる點多かるべきも其原理に於ては敢て誤る所なきものとす。

余は不完全ながらも、人相學は其原理を心理學動物學社會學に取るものなることを説明せりと信す。而て其對象とする所心身の二者にあれば、補助學科として數多の學術を要すること勿論にして裨史小説は風俗人情の精緻なる觀察を教へ、美術は古今人体の模範を示し、生理學は人体の構造作用を

教へ、骨相學は頭顱の形狀と人の性質との關係を示し、考古學は古代の風俗習慣を教へ、歴史は古人の性行を示し、人種學は地球上人類の形質分布を教へ、土俗學は開明人、野蠻人の風俗習慣の異同を示し以て人相學に一臂の力を添ゆるものなり。且つ人類學と病理學とは特殊の關係を有するものにして、人類學の必要なるは生理學、骨相學、土俗學、人種學、考古學、史學等を包括するの故なり。病理學の必要なるは疾病の遺傳素因 *Cause Remota* と人体の形質との關係を明かにし、放火狂、竊盜狂、酒狂、色狂等の偏狂 *Monomania* 其他の精神病と身体の徵候との連絡を教ふるを以てなり。此に由て之を見れば、所謂科學としての人相學は心理學、動物學、社會學に基礎を置き心身の性質を明にする諸學に材料を取り、科學的に組織せられたる智識ならざるべからず。人相學の研究も亦難哉。

余は今此編を終らんとするに當り、讀者に一言せざる可らざることあり。そは人相學は理論の學にあらずして實用の學なることこれなり。思ふに諸君は日々多少觀相の術を行はざることなかるべく、其當否は措て問はず、未知の人に會せしとき人相を見て其性質境遇の幾分を推察することを得るや必せり。實に吾人は先天的に觀相の術を知るものにして兒童の父母の心を察知え、白痴者の他人の意を推察するを得るを見るも明かなり。諸君若し宇宙に於ける人類の地位を知り、國家の一員として、人類の一員として愉快に人生を經過せんと欲せば、宜しく人相の學を窮め觀相の先天的機能を發達せしむべし。一旦此學の蘊奥に悟入せんか、世界億万の人類眼中にあり、人類社會の事掌中に運すべきのみ。我同窓六百の快男子中、十年の後震天動地の大業を成すものは豈此種の人にあらざるなきを得んや。